

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2190800033		
法人名	有限会社 きずなの里		
事業所名	みやまの里		
所在地	岐阜県山県市富永754番地5		
自己評価作成日	平成30年10月25日	評価結果市町村受理日	平成31年2月25日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaisokensaku.mhlw.go.jp/21/index.php?action_kouhyou_detail_2018_022_kani=true&JigyosyoCd=2190800033-00&PrefCd=21&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 きふ福祉サービス利用者センター びーすけっと
所在地	岐阜県各務原市三井北町3丁目7番地 尾関ビル
訪問調査日	平成30年12月26日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>豊かな自然環境の中で、季節の変化や 近隣の人々との交流を楽しみながら、思い思いの暮らしをして頂けるような支援を目指しています。利用者お一人お一人の個性や能力を大切にし、ご自身の力で生きていかれるお手伝いをさせていただきます。</p>

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>事業所は、近くに武儀川が流れ、山々に囲まれた自然豊かな環境の中にある。職員は、利用者が日常生活の中で、不便のないよう見守りながら、支援に努めている。ホームのイベントやボランティア訪問時には、地域住民と笑顔で交流できるよう工夫し、取り組んでいる。広い敷地には自家菜園があり、食事作りでは、庭で育てた旬の野菜を利用し、利用者も出来る人が出来ることに関わっている。職員と利用者は、元々、地元の人が多く、馴染みの関係でもある。管理者は、働きやすい職場環境を整え、さらに研修受講を奨励し、職員の質の向上をめざしながら、より良い利用者支援が出来るよう取り組んでいる。</p>
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目: 23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目: 9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目: 18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目: 2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目: 38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目: 4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目: 36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目: 11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目: 49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目: 30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目: 28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価票

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は理念として作成し、全員が各自で携帯しているが、それとは別に その基本となる心構えを内玄関に掲げ、日々それを見ることで、思いを新たにしている。	理念は「誠心・誠意・まごころを込めて」掲げ、目につきやすい場所に掲示し、地域と関わりながらの支援を日々確認している。また、全職員が「みやまの里介護スタッフの心得」を携帯し、日々振り返りながら、利用者の満足につながるよう実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の住民の中にスタッフやその家族が居住していたり、自治会の準会員として仲間入りをしている。日々の生活の中で、声掛けやレクへのお誘いなどごく当たり前の交流をしている。	自治会の準会員として、できる範囲で行事に参加している。地域の清掃活動では、事業所近隣の清掃を行っている。また、事業所の各種イベントに送迎を行って、住民を招いたり、公民館行事に積極的に参加するなど、地域の一員としての交流をしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	施設入所中のご家族を対象に認知症サポーター養成講習を実施し、その会に地域の方々への参加を呼びかけ、実際に参加していただいている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進委員からのアドバイスを日々のサービスに活かすだけでなく、施設運営上の困りごと等、行政への意見具申などをして頂いたりもしている。	隔月に開催する運営推進会議には、行政、民生委員、自治会長、家族代表等が参加をしている。行事報告や今後の予定など、具体的な課題で意見交換を行っている。また、協力医と看護師の参加もあり、医療面について、説明や指導を受けている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議へ出席して頂くだけでなく、日ごろから市へ足を運ぶことがあり、担当者との連携を取っている。困りごとの相談などにも応じていただき、アドバイスを受けていたりもしている。	運営推進会議の中で、市の担当者に、認知症カフェの紹介や介護保険の動向など説明を受けている。日常的に行政とは連携を密にし、介護現場での困難事例や相談など、意見交換しながら利用者サービスに活かしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	権利擁護推進員養成研修に毎年1人ずつ参加するようにしており、そこで得た知識や情報は、その都度職員全員で共有するように努め、身体拘束の無いサービスに努めている。また、身体拘束適正化検討委員会も立ち上げて、活動を開始している。	身体拘束をしないケアを実践し、「身体拘束予防チェックリスト」で、日々確認している。職員は、行政主催の権利擁護推進員養成講座で学び、全職員で共有しながら、利用者にとって、安心・安全なケアを実践している。また、身体拘束適正化検討委員会を定期的に開催し、研修会も計画的に行っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	上記同様、ミーティングや伝達講習などの機会を持ち、職員全員で、意思を統一し、防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	前記同様、職員全員で学ぶ機会を持ち、知識の共有や意思統一につとめ、日々のサービスに活かすよう努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	見学の時点から説明には心がけ、利用者・家族の思いを汲む努力をしている。改定時には、説明をしたうえで同意書を頂ける様にしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族を含めたイベントの際には、説明の時間と意見を頂く時間を設け、また日ごろの面会時などには少しでも話を伺えるよう面談の時間を設けるようつとめ、それらを日ごろのサービスに反映させるようにしている。	家族の訪問時や運営推進会議など、様々な場で家族と交流しながら、意見や要望を聞いている。隔月にホーム便りを家族に送付し、行事や利用者の状況を知らせている。遠方の家族には、電話や手紙で意見を聞き、運営やサービス向上につなげている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	週1回のミーティング、月1回の全員ミーティングの時間を設け、職員からの意見を取り入れるよう努めている。ミーティングに限らず、日々の生活の中での意見 具申にも耳を傾けるよう努力している。	管理者は、日常的に現場に入り、職員の意見や要望を聞き、迅速に対応をしている。職場環境を整えながら柔軟な対応に努めている。職員の定着率は良いが、利用者の重度化や職員の高齢化など、今後の改善課題も多くあり、現在、検討中である。	管理者は、職員の専門職としてのモチベーションアップに向けて、内部・外部を含めた研修を継続的に実施する計画である。それらの研修開催、受講推進の実現に期待したい。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職場環境や労働条件に関しては、極力職員の意向に沿うよう努めている。が、利用者の状況については、職員の意向に沿えない場合がままあり、それについては苦慮している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修等については、参加しやすいように援助しているが、研修場所によっては だれも参加できない場合がある。援助とは、勤務日の調整や、費用負担などのこと。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	最近では職員の相互訪問の機会はなくなったが、管理者に関しては、交流の機会が多い。同業他社との協力関係はできていると思う。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前の見学や事前面接等の段階から、気兼ねなく話して頂ける雰囲気作りに努力し、思いを遠慮なく話していただけるよう努めている。事前面接等には、都合のつく職員複数で訪問し、なじみの人を多く作れるよう工夫している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	こちらからお尋ねすることだけでなく、なるべくご家族の方から話していただけるように会話を運ぶ努力をしている。長時間になっても、十分に話していただけるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	その時まず必要なのは入所することであり、それに向けてどう支援するかを考えている。ただ、当施設に入所して頂くことだけを選択肢として考えるのではなく、色々な方法を提案することで、何が大切かを見極めるよう努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	～してあげると考えるのではなく、すべてに関してさせていただくよう努めている。できることは職員の業務であってもお手伝いして頂いたり、支援そのものもお手伝いしてよいかどうかを本人に確認してから実行するよう努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入所時あるいはそれ以前の面談時に、加速と施設とがお互いに助け合ってご本人の生活を支えていくことを再三お話している。少しのことでも連絡を取り合い、お互いの意思疎通に努めるようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入所してしまわれると、それまでの社会や人間関係などに対して無頓着になられる家族を比較的多くみているが、ご本人の思いを十分にお伝えすることで、以前の関係を維持できるようお願いしている。が、なかなかうまくいかないことが多い。	家族や親戚、友人の訪問時には、ゆっくりと過ごせるよう雰囲気作りを心がけ、関係継続を支援している。遠方の家族には、利用者が手紙でやり取り出来るよう支援している。公民館行事で、知人や馴染みの人に会う利用者もある。個々の外出希望には、家族に協力を依頼している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	地域密着ということもあり、入所前から関係を持っている方もある。それは良い面もあれば悪い面もあり、ここでの仲間意識を持っていただけるような支援に努めていても、以前の印象を拭い去ることが出来ない場合もある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了に至る経過も勿論であるが、その後も電話や郵便等で連絡を取り合ったり、施設への来所という場合などもある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	職員からのモニタリングに加え、日ごろから利用者との接触をこまめに取りよう努力をし、日々の生活の中で思いを掴めるように努めている。	職員は、個別ケアや入浴介助などで、利用者一人ひとりの思いや意向を把握し、希望が実現できるように努めている。把握が困難な利用者には、職員が時間をかけて話をしたり、家族からも情報を得て、それらを職員間で共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所時に提供されたこれまでのサービス事業所からの情報に加え、本人や家族からの聞き取りなどからつかむよう心がけている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員のモニタリングや、日々の生活状況の記録、かかりつけ医からのアドバイス等とともに、生活の状態を見ながらつかむよう努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	モニタリングやケアカンファレンス、ミーティング、家族との面談などから多くの意見を取り入れ、変化に応じたプラン作成に努めている。	介護計画作成時には、家族の意向を聴き、意見交換し、利用者に最適な支援計画作りを実践している。サービス担当者会議には家族が出席し、介護記録をもとに、管理者、計画作成者、職員が話し合いながら、利用者と家族の思いを反映した計画作りを行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人ファイルは、職員・管理者それぞれがきちんと記録を残し、機械を捉えてはケースカンファレンスや毎日の引継ぎ等において情報を共有したり、意見交換をしながらプラン見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	サービスの多機能化とはグループホームにおいてはどうかやっていくのか 今一つ理解し難いが その時々で発生するニーズに対して出来得る限りの発想を活かして対応するよう努めている。		

岐阜県 グループホームみやまの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源が様々あることは理解できたが、利用者本人に活用出来得るものか同課が問題。利用者の重度化は、そのまま地域資源活用が無理な方へと進んでいってしまうことが多い。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	定期的訪問診療は欠かさず受けられ、かかりつけ医と施設、かかりつけ医と利用者の関係も良好に保たれている。かかりつけ医からの紹介による他科受診なども困難なく可能となっている。	契約時に、かかりつけ医について、事業所の方針を説明し家族が選択をしている。協力医は、月2回の往診があり、個々のかかりつけ医希望は、訪問診療ができることを条件にしている。管理者が看護師でもあり、協力医療機関と連携しながら、適切に支援を行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日頃の利用者のわずかな変化も看護師に報告がなされ、それはかかりつけ医へとつながる。管理者が看護師であるため、わずかな異常変化などにもその場での対応が可能となっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	提携病院はもとより、その他の病院でもかかりつけ医の紹介で入院することがあるが、いずれにしても情報交換や意見交換は常に行い、定期的に面会に訪問するなど、状況の把握に努めている。病院と家族をつなぐ橋渡し役にもなっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時にきちんと話し合っているが、重度化や終末期に関する気持ちは流動的なものと考えられるため、その場合場合に直面した時に再度、或いは再再度話し合うことで、お互いの思いを確認しあえるように努めている。	重度化や終末期の対応について、家族と利用者に説明し同意を得ている。利用者の状態変化時には、早い段階で関係者が十分に話し合い、方針を共有している。職員の支援で、生活が可能までとし、終末期の対応については、話し合いを重ねながら、自然な看取り介護支援にも取り組んでいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	年2回の消防訓練時に追加の講習として対応についての訓練を受けたり知識を得たりしている。また 施設外でそのような研修の案内があれば紹介し、参加を促している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防訓練の一環として 火災以外の災害への対応の訓練も行い、さらに夜間想定や、地域の方々の栈かをお願いした訓練を行ったりしている。	夜間想定を含め、火災や地震等の訓練を実施し、連絡網の確認、関係機関への通報、器具の取り扱いなど詳細に実施している。災害時における福祉避難所として、市と協定を結んでおり、近隣との協力体制も築いている。備蓄品の完備、点検も実施している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	その方の性格や身体的特徴などをよく理解することに努め、その方に合った対応姿勢を取るよう心がけている。また、新しく気付いたことなどは職員全体で共有し、ご本人を傷つけることの無いように努めている。	職員は、常に、利用者一人ひとりの人格を尊重し、理念である「誠心、誠意、まごころを込めて」の生活支援を行っている。また、各居室の棚、トイレ、浴室なども、プライバシー保護と羞恥心に配慮した適切な設備を整えている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	思いの表出や自己決定の無理な方もいらっしやるため、表に現れたことだけでなく、思いやりを持ってご本人の思いに添えるよう努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	施設の都合上、入浴や外出の機会などは、一人一人の思いの通りには対応でき切らない部分もあるが、そのほかのことに対しては、できる限り添えるよう努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人の意思を尊重し、整髪には訪問理美容の利用、衣類はこまめに洗濯するなど、清潔を基本に、好みの化粧や身づくろいが出来るよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	一緒に食事の準備や片づけが出来る状態の方が現在はおられないが、職員のメニュー作り際にはご希望を伺ったり、配膳用トレーを拭いていただいたり、中には下膳をしてくださる方もある。	近隣からの差し入れや、ホームの菜園で作った旬の野菜も食材として利用し、職員が交代で、朝昼夕の三食を作っている。利用者も、皮むきや食器拭きなどを手伝っている。職員は見守りながら、利用者と会話し、和やかな食事に心がけている。郷土料理が話題になり、職員が利用者から学ぶことも多くある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	摂取で来た食事量・水分量・おやつなど、きちんと記録することで、かかりつけ医の診療の一助となるとともに、ご本人の状態は悪の目安ともしている。またそれをもとに職員は個々の能力・体調・好みなどの情報を得、支援の糧としている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアは勿論、日々の観察や、本人からの訴えをもとに 歯科受診なども含めてケアをしている。義歯の手入れなどについても個々に対応をしている。		

岐阜県 グループホームみやまの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	夜間のみ紙おむつ対応の方が1名あるが、昼間は布パンツやリハビリパンツ利用で対応している。居室にはポータブルトイレをおかず、極カトイレへの誘導で対応している。	できる限り、トイレでの排泄が習慣になるよう、声掛けと誘導で、排泄の自立を支援している。夏は布パンツで対応できるよう努め、夜間は個々の状態に適した支援を行っている。排泄の失敗を減らし、排泄用品の軽減にもつなげている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	運動不足からか、ほとんどの方が便秘になる傾向があり、日々チェックをして、水分補給や食事の工夫だけでなく、冷水や冷牛乳などでも対応している。効果の無い方にはかかりつけ医との連携により、薬剤の投与もしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	職員数の都合上、入浴日や入浴時間の制限はやむを得ない。ただ、本人の体調や、身体の汚染の状況等によっては、施設の都合に関係なく対応している。	入浴は週3回を基本としている。ほとんどの利用者が、入居時には水虫を患っていたが、入浴日以外に、足浴支援を継続的に行なってきたところ、ほぼ全員が外見的完治に至っている。入浴は、すべての利用者に必ず介護者が付き、利用者の状態に応じて、2-3名で支援し、安心・安全な入浴が提供できるよう配慮している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	就寝、起床の時間を決定せず、ご本人の思いに合わせて対応している。居室の換気や、布団干し、採光の調節など、気持ちよく休息できるよう整備をしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬情については、職員全員が知識を持てるよう、個人ファイルに添付している。処方を受け取ってから本人の口に入るまでに7回のチェックを実施するようなシステムを作り、それに沿って支援ができるよう工夫している。また、変化があれば、その都度かかりつけ医に連絡をするよう努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	施設内でのイベント、ボランティアさんの慰問、外食会、野外食など、変化のある生活が出来るよう支援に努めている。また、趣味などには積極的に応援できるよう努めている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	それぞれの状況を鑑みて、外食会やお買い物などを工夫していたが、現在はそれに耐えられるような状況の方が減ってしまい、施設外へ出られる機会が減ってしまった。個人的には家族と共に外出できるよう機会を作るような働きかけをしている。	天候や利用者の健康状態を考慮しながら、近隣を散歩したり、庭でのお茶会や食事などを取り入れている。重度の利用者も多くなり、遠方への外出は困難になっているが、ホームの夕涼み会、花見、開設記念行事などに、住民や家族を招待し、交流をしている。	

岐阜県 グループホームみやまの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お買物会を催していたが、最近では外出そのものが困難な方が増え、施設内で現金を所持している方はいない。その方の能力に応じて、家族との外出の際など、ある程度の現金をお渡ししている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	外部からの電話の取次ぎはもとより、希望されれば外部への電話も応援している。手紙などもその都度ご要望にお応えしている。 例、封筒の提供・あて名書き・切って張り・投函など		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	キッチンと掃除を行き届かせること、換気をして異臭を防ぐこと、カーテンや照明で明るさの調整をすること、などの特に留意し、不快感の無い生活空間を提供するよう努める。花や花瓶を置かないこともあり、利用者と職員協働の作品作りや、その季節特有の行事等で季節感を味わって頂くなど、温かみを加えた生活感を出すよう心がけている。	共用の間は、清掃が行き届いた清潔な空間であり、利用者と職員と一緒に作った、季節感ある様々な作品が掲示してある。リハビリやレクリエーションなどに利用できる十分な広さもある。明るい陽射しが差し込み、窓から自然の景色を眺めることができ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	なるべく、仲の良い気の合う方同士が近くに居られるよう席の工夫をし、気分によっては、自由に移動もできるようにしている。基本的に、席や居場所を決定づけてはいないのであるが、いつの間にか自然に決まってくる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所時には、新規購入することをなるべく避け、自宅で使っていたものをお持ちいただくようお願いをしている。居室のレイアウトは本人と家族におまかせしている。自宅のご自分の部屋を移動したような感覚で過ごせたらいいと思っている。	各居室の入り口には、表札と好みのカーテンをかけ、自分の部屋が分かりやすいよう工夫している。使い慣れた家具を配置し、写真、作品、書籍が置かれている。日当たりが良く、居心地よく過ごすことの出来る居室である。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設全体がバリアフリーであるとともに、死角の少ない作りになっており、職員が大きく動かずとも全体を見守れるようにしている。居室には表札や飾りで、個性を出し、共用スペースにもそれぞれ名札をつけ、解りやすくしている。		